

沖縄県ハンドボール協会 スポーツインテグリティ研修会（2023・2・22）

昨日は研修会にご参加頂きありがとうございました。皆さんの「私は、いま、こう思う」を個人が特定できないように加工して一覧にしています。研修会内で「自分の価値観」を言葉にし、ペアディスカッションで「他人の価値観」を知り、この振り返り Paper で同じ研修会内での仲間の「多様な価値観」を学ぶことに繋げてもらえればよいと思います。

「学ぶことを止めたら教えることを辞めなければならない」という言葉が胸に刺さりました。指導者を担うことに責任を持ち、生徒に充実感を与えられる指導者になりたいと感じました。

子どもたちにとって何が大切なのか、どのような指導をしていくべきか、常に考えられる指導者でありたいです。学び続けながら、子どもたちに寄り添い、共に楽しめる指導者を目指していきたいです。

頭では理解しているハラスメント禁止だが、自分の指導が該当しているか否かを、もっと自分で俯瞰視しなければいけないと思うし、保護者や顧問の先生に見てもらふ必要があると思った。また、ボランティアという点から指導者として甘えている部分があり、今後は責任感を持って取り組まなければならないと感じた。しかし、仕事や私生活まで時間を犠牲にする事も実際には出来ないのも、周りからサポートやアドバイスを頂きながら、取り組んで行きたい。

子どもたちに教えるにあたって、自分が学ぶことをやめたら時代遅れの子どもたちを育てることに繋がると感じました。体罰・暴言・パワハラのない指導をしていけるよう、周りの指導者と共有していきたいと思います。

私を育ててくれた親、これまで出会った仲間や先生、指導者との関わりの中での経験が自分を作っていることを強く感じています。そんな中で指導者という立場となり、私の経験の中での指導となることを改めて考えさせられました。私自身は、子供たちに、ハンドボールの楽しさを伝えたいと考えています。まだまだ始めたての子供たちなので、厳しい練習や厳しい指導はほとんどありません。でも、カテゴリが違ったり、今のチームが成長してくることで、自分の指導がどうなるのかという不安が残りました。ただ体罰の否定派であることは変わらないので、まずは、子どもたちの充実感や楽しさを、意識した指導を心がけていきたいと思います。そのためにも学び続けていきたいと思います。

自分が今まで受けてきた指導や指導者からの言葉について、経験論でのハンドボール感をとらえている部分が多かったと研修会を通して感じた。また、指導者として絶対でなければならぬと心のどこかで思っていて生徒を成長させることが指導者としての意義、意味だと思っていたので、認識を改め、自己成長のための指導の研鑽を重ねていきたい。

体罰や暴言の経験が有効的だった時もあったとは思いますが、自分にとって当たり前だった、有効だったか

らといって、今の時代の子ども達に許されることではない。また、体罰という指導方法ではなく、子ども達との信頼関係を築き、声かけ等で体罰やハラスメントのない指導方法で結果を残せるような指導方法を模索することが大切だと感じた。八重山では、実業団を経験していた人や、強豪校で指導してきた人が多いわけではない。指導する立場になった時に、自分のやってきた経験だけで指導する指導者であってはならないと感じた。指導する立場として、常に学び続けることを辞めず、指導者自身が成長していくことが大切だということを改めて感じた。また、指導して行く中で、子ども達がチームを離れる時にここにいた時間は無駄ではなかったと思って貰えるような指導者を目指していきたい。

私自身今まで体罰があまりない環境で部活動をしてきました。先生から受けた体罰、暴言などは一生記憶に残るものだと思います。最後にあった先生からしてもらったことは生徒へそれが伝統となるという言葉聞いて今自分が教師として生徒に指導するときの言動を意識し悪い伝統を残すのではなく良い伝統を繋げていきたいと感じました。指導者が陥りやすいことのページを見て部活動の顧問だけでなく全ての教諭、指導者に共有できる研修会などがあつたらより良い教育に繋がると思いました。この研修で学んだことを活かして自分が理想とする教師像に向け日々研鑽を続けたいと思います。

今回の研修で指導者が学んでいくこと、時代に即した指導にアンテナを貼りながら常にアップデートしていくことの大切さを改めて確認できました。自分の経験則だけを押し付けたり、成功体験にとらわれることがこれまでの指導を振り返るとありました。目先の結果だけでなく、子どもたちの将来をいかに考えられるか、現場においてはとても難しい課題だと思いますが指導者として追求していきたいです。理想の指導者像を常に考えながら八重山の子どもたちが世界に羽ばたいていくような環境を作っていきたい。

今回の研修を経て、スポーツにある価値、スポーツを通した価値を再考する契機となりました。指導者がスポーツを通して何を学び、身につけていくのか、明確な指導観を持って子供達と接していきたいと感じました。厳しさだけでなく、その競技と指導者が愛される指導を心掛けていきたいと思います。

私も暴言・体罰について過去振り返って考えてみるともちろん体罰、暴言には否定的ではありますが、少なからず、場面によっては肯定的な部分がありました。暴言について『やめろ』『帰れ』はあったと思います。また、自分自身が教えられてきた環境も沢山の体罰とも言えることがあったと思います。現在中学生の指導する者として多く学ぶことができました。楽しさを教えられる、喜びを与えられる指導者を目指していきたいと思います。